
彼女。

ling-mei

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼女。

【Nコード】

N5077C

【作者名】

ling_mei

【あらすじ】

青木雄司（僕）は、自動車の修理工場で働く、ごく普通の青年。夏のじめじめした日、目の見えない少女と出会い、互いに引かれ合い始める。

プロローグ

僕は今まで、数多くの女性に会った。魅力的な人中にはいた。けれど、僕はそのどれにも興味をもてなかった。高値の花だとか、そんな頭のいい理由なんかじゃない。僕には必要ないと思ったのだ。それなのに、何故だか彼女にだけは。彼女にだけは、僕は、心を奪われた。

彼女は自分を“出来損ない”と言った。そして、“独り”だとも。

僕は、生まれてから彼女だけを求めていたのかもしれない。……今だから言えることだけだ。

運命と呼べるほどの大したものじゃない。でも、僕は、あれが運命でなかったとは、どうしても断言できない。あれは運命だったんだと、つい、自分に言い聞かせてしまう。

彼女は、どこか人生に対する脱力感で満ちていた。けれど、内側には、とても大きな優しさを抱えていた。

限られた時間を、彼女は、他人にはわからないような形で、彼女なりに歩んでいた。誰にも真似できやしない、彼女だけの歩き方で。

第1話

彼女に出会ったのは、四年前の夏だった。梅雨も終盤に差し掛かり、じめじめした空気と、いつまでもねちっこく降り続く雨にうんざりしていた頃だった。

どんよりとした曇り空の下、僕は、仕事帰りのいつもの道を、とぼとぼと歩いていた。人通りの少ない、住宅地に伸びる歩道だった。道脇に植えられているサザンカの葉の色も、曇り空の色のせいで、幾分くすんで見えた。ところどころに残る濁った水溜りに足を取られないようにしながら、僕は、ぼろぼろの油だらけのスニーカーと、裾の擦り切れた汚いジーンパンを引きずっていた。仕事先の工場で、仕事仲間と些細なことで言い合いになり、すっかり気分は沈んでいた。だから、自分の足元にしか目が届いておらず、前の方に目をやることなどすっかり忘れていた。

「きゃっ」

小さな声を立てて、目の前で誰かが倒れこんだ。僕も、後ずさりしたときに、上手い具合にコンクリートの凹みに足を取られ、しりもちをついてしまった。僕が焦って声のした方を見ると、一人の女性がうずくまっていた。ぼおっとしていたせいで、まともに彼女と衝突してしまっただけ。彼女は華奢な膝を抱えて、痛そうに何度もさすっている。僕はおろおろしながらも、何とか謝った。

「あの……すみません」

彼女は顔を上げることなく、繰り返し膝をさすっている。すると、彼女の膝から、真っ赤な血が滴り落ちた。

「大丈夫ですか？」

僕はどうしたらいいのか分からずに、ただ彼女の様子を見ていた。

「大丈夫」

彼女は膝をさする手を止め、はっきりとした口調でそう言うと、ようやく顔を上げて僕を見た。しかし、不思議なことに、彼女の視

線と僕の視線は、空中で触れ合うことはなかった。彼女の視線は、どこかまったく遠くを眺めているように見えた。

「えっと……」

僕が何か気の利いたことでも言わなければと考えていると、彼女は自分の手のひらを握ったり開いたりした。そして、なくしたものを探すように、必死にコンクリートの上に手を這わせ始めた。

「何か落とされたんですか？」

彼女は僕の問いかけに対し、何も答えようとしなかった。僕はどう一度尋ねてみた。

「一緒に探します」

「いいえ」

彼女はやはりはっきりとした口調でそう言う。血だらけの膝などそっちのけで、ただ何かを探すそぶりをしている。僕は、歩道に並ぶサザンカの植木の隅に転がる、白い杖を見つけた。以前にテレビで見たことがあった。視覚障害のある人が、こんな感じの杖であちこちをつつきながら歩いているところを。

「これですか？」

僕は、その杖を取り上げ、彼女の前に差し出した。彼女は、暗闇を探るようにゆっくりと手を伸ばし、その杖に触れた。そして、ほっとしたような表情をして、杖をしっかりと握った。

「よかった」

小さくつぶやき、彼女は大事そうにその杖を抱えた。

「家は、この辺りなんですか？」

僕がそう聞くと、彼女は少しだけ緊張したような様子でうなずいた。唇をかみ締め、わざと勢い良く立ち上がって見せた。そして、僕に言った。

「もう行ってください。大丈夫ですから」

しかし、彼女の膝からは、真っ赤な血が垂れている。さっき地面にはいつくばったせいで、傷口にはばい菌が入っているだろうと思われた。

「血がひどいから……洗わないと」

僕は彼女の膝にそっと触れて言った。彼女は一瞬身体を強張らせたようにびくつとした。僕の心配をよそに、彼女は首を勢い良く横に振る。

「いえ、大丈夫です」

「大丈夫じゃないよ」

僕は彼女の手を握った。彼女は、明らかに目が見えていないのだ。さっき、視線がうまく合わなかったことも、この白い杖も、そして、微かにちらついている彼女の、動作一つ一つに対する不安感も。それらはすべて、彼女が盲目であることを示しているようだった。僕には、盲目の彼女を放っておくことなどできなかった。人として、そんなことできるはずもないと思った。けれども、彼女はひどく僕を拒もうとした。手を振り解こうと、必死に腕を引っ張った。

「君は目が見えないんだろう」

思わず僕はそう言った。“メガミエナインダロウ”という言葉に、彼女はひどく敏感に反応した。

「一人でやれるわ」

「無理だよ」

僕は、嫌がる彼女を抱きかかえると、急いで水道を探した。幸い、しばらく行った先の角を曲がったところに、小さな公園があることを思い出した。彼女の持っていた杖も一緒に持ち、僕はできるだけ静かに歩いた。目の見えない彼女が不安がらないように、細心の注意を払ったつもりだった。

「下ろしてください」

彼女は絶えずそう言ったが、僕はその言葉に耳を貸さなかった。

第2話

しばらくして公園につき、水道が一番近いベンチに彼女を座らせた。彼女はようやく落ち着いた様子で、黙ってうつむいていた。僕は、ポケットからしわくちゃのハンカチを取り出すと、水道のところに走り、ハンカチを水で濡らした。

「ちょっとしみるよ」

僕は静かに言うと、彼女の膝にハンカチを当てた。彼女は、身動き一つしなかった。

「痛くないんですか」

「痛いわ」

彼女は少しばかりぶっきらぼうにそう言った。僕はそれを聞いて思わず笑った。

「何がおかしいの？」

「何でもないよ」

僕がそう言うと、彼女はますます機嫌を損ねたように頬を膨らませた。そして、何とか聞き取れるくらいの小さな声でつぶやいた。

「見えないから、ばかにしているんでしょ？」

心なしか、彼女の声はかすかに震えていた。

「そんなことないよ」

「嘘」

彼女は、泣きたいのを必死にこらえているように思われた。僕は、そのことに気付かないふりをしながら、彼女の血がついたハンカチを洗いに、また水道の蛇口へ走った。そして、水をたっぷり含ませてからベンチに戻った。彼女は相変わらずうつむいたままだ。僕は何も言わずに、彼女の傷口にハンカチを当てた。

「ねえ」

ふと、彼女は言った。

「それ、きれいな？」

僕は、しわくちゃのハンカチに目をやった。それから、このハンカチを洗った日の記憶をよみがえらせようとした。

「ええと……一昨日洗ったやつだよ。アイロンはかけてないけど、今日はまだ一度も使ってない」

「今日は一度もトイレに行かなかったの？」

彼女はまた言った。僕はしどろもどろに答えた。

「忙しくて手を拭いている余裕がなかったんだ。……別にトイレに入って手を洗わなかったわけじゃないよ」

しばらく空白が空いたあと、ぷつんと弾けたように彼女は笑った。とても、可愛い声だった。僕もつられて笑った。

雲が流れ出した。どんよりしていた曇り空の隙間から、オレンジ色の夕日が差し込み始めた。夕日は彼女の顔を鮮やかに染め上げた。僕は、いつの間にか、仕事で沈んだ気持ちを忘れていた。学生のころ、友達と繁華街で寄り道をしていたときのように、少しだけハイな気分になっていた。

彼女はひとしきり笑うと、はっきりと、けれど優しい口調で言った。

「ありがとう」

その一言に、胸が締め付けられる思いがした。

第3話

日曜日。その日は、仕事が休みだった。僕は、レンガ造りの大きな邸宅の前に来ていた。磨き上げられた表札と、カメラの付いたインターホンの前にし、少々緊張していた。僕は、意を決してベルを鳴らした。機械的な音が響いた。僕は、前髪を少しだけ整えた。インターホンの奥から、カチャツという音がして、誰かの声がした。

「どうぞ」

声と同時に、目の前の門が、重たそうにガチャンと音をたてた。

僕は門をゆっくりと押し、レンガの壁の奥へと足を踏み入れた。色鮮やかなアジサイが目に残った。青く濃く色づいていた。こんなに大きなアジサイは、今までに見たことがなかった。

「こっち」

アジサイに気をとられていると、庭の向こうのドアから、初老の女性が顔を出して手招きをした。きれいなふわふわの白髪が印象的だった。僕は軽く会釈をしながら、その女性のもとへ歩いていった。

「おあがりになって」

女性はそう言いながら、僕を玄関へ通し、若草色のスリッパをすすめた。家はあまりに豪華で、玄関があまりにきれいだったから、僕は、自分の汚らしいジーンズと、黒ずんだスニーカーとを見比べて、とても恥ずかしい気持ちになった。そんな僕の心の内がわかったのだろうか、女性は笑って言った。

「いいのよ。 気になさらないで」

笑い方が、あの女性と少し似ている気がした。

床は、傷一つないフローリングで、ぴかぴかに光っていた。壁は真っ白だった。僕は、自分のアパートの狭さと汚さを思い浮かべながら、こんな邸宅に住めたらどんなにかいいだろうと、のんきに考

えていた。白髪の女性は、紺色の涼しげなワンピースを着ていた。上品で、清潔な様子が、服装からだけでも見て取れた。僕は、ぐにやぐにやのシャツのしわを伸ばしながら、女性の後について歩いた。ほどなくして、広いリビングに通された。ベージュのふかふかのソファ、ガラスのテーブル、スリッパと同じ若草色をしたカーテンと、壁一面に広がった大きな窓。天井からは、立派なシャンデリアがぶら下がっている。

「座ってください。 コーヒーとお紅茶、どっちがいいかしら」

僕は、向かい合って並べてあるソファのどちらに座るべきかを考えるのに必死で、彼女の質問になかなか答えられずにいた。彼女は思い出したように言った。

「美味しいお紅茶をいただいていたのよ。 ミルクととっても合うの」

そう言って、彼女は僕に、紅茶でいいかと尋ねた。僕は状況を理解できないままに、ただうなずいた。僕のうなずくを見ると、彼女はリビングとつながっているキッチンへ、いそいそと歩いていった。

「リッチだなあ」

僕は、ソファに身を沈めながらつぶやいた。そのとき、廊下から、微かな足音が響いてきた。そして、リビングの入り口から、ためらいがちに若い女性が入ってきた。彼女だ。

「こんにちは」

僕が言うと、彼女はぺこりと頭を下げた。そして、ゆっくりと僕の声のする方へ歩いてきた。僕は、彼女の手を取った。一瞬、彼女は身体を震わせたが、すぐに安心したように表情を緩めた。僕は、隣に彼女を座らせた。

「お礼がしたいって」

彼女は膝を揃えてソファに座り、とても小さな声で、ゆっくりとそう言った。僕は、彼女のスカートの裾からのぞく絆創膏を眺めながら言った。

「でも、怪我をさせたのは僕の方だから」

彼女は首を横に振った。キッチンから、白髪の女性がトレイを持って出てきた。銀色のトレイに、花柄の装飾のほどこされたカップが三つ。

「どうぞ」

女性はそう言いながら、慣れた手つきでテーブルの上にカップを置いた。

「甘いものは好きかしら」

「いえ……甘いのは苦手」

僕がそう答えると、隣にいた彼女は小さく笑った。

「あ、僕何か変なこと……」

彼女は口を開きかけたが、すぐに唇をぴたりと閉じてしまった。

白髪の女性は、自分も向かい合わせのソファに座った。

時間は比較的ゆつくりと流れた。慣れない紅茶と、ふかふかすぎるソファの感触に、僕は自分を順応させることができずにいた。女性には物静かな喋り方をした。僕は、こちらから話しかけるようなことは滅多にせず、ほとんど女性の質問や話題に答える形でいた。

「お名前、青木くんだったわよね」

僕は、熱い紅茶に手こずりながら、何とか返事をした。

「お仕事は何をなさっているの？」

「自動車の修理工場」

「もしかして、この先の村上さんのところかしら」

「はい」

女性は、頭に手を当てて、“村上さんの修理工場”への道を思い出そうとしているようだった。僕は、熱い紅茶を飲むことをあきらめ、テーブルの上にカップを置いた。隣に座って黙っている彼女は、まだ一口も紅茶を飲んでいなかった。僕は、彼女のカップを取り、そっと手に持たせた。彼女は、柔らかなものに触れるように、そっとカップの取っ手に指を通し、熱い紅茶に、慎重に唇をつけた。静かに喉を鳴らして一口だけ飲み込むと、僕の袖をつかんで小さく引

っ張った。

「もう、いいの？」

彼女は、僕の問いかけに無言でうなずいた。僕は、彼女からカッ
プを受け取り、テーブルの上に戻した。

「ねえ、今度はいつお仕事がお休みになるの？」

初老の女性は、ふいに尋ねた。僕は、毎週日曜は工場が休みだと
答えた。

「次の日曜日、またよかったらいらして」

女性はそう言ってから、小さな名刺を差し出した。それから、僕
の隣に座って身を固めている彼女に同意を求めた。彼女は、小さく
うなずいただけだった。決して口を開こうとはしなかった。

第4話

帰り際、白髪の女性は僕を門の先まで見送ってくれた。

「ご迷惑だったかしら？」

「いえ、そんなこと……」

僕は焦って否定した。迷惑だったわけじゃない。自分に馴染みのない高級なものだらけだったから、戸惑っていたただけだった。

「あの子はね」

女性は遠い目をして言った。まるで、ずっと昔を思い起こすかのように。

「生まれたときから光を知らないのよ」

女性は自分の白髪に触れながら続けた。

「どんなに高級な邸宅を建てても、庭師を雇ってきれいな庭にしても、あの子にはそれが分からないの。目が見えないから」

僕は何も答えられなかった。僕にはあまりに重たすぎることであった。というよりも、むしろ、この女性は、おそらく僕なんかの返事を期待してなどいないだろう。ただ、吐き出したかっただけなのかもしれない。

この人は、どれだけの間、彼女と過ごしてきたのだろう。目の見えない彼女と、どんな会話を交わしていたのだろう。どんなに美しい景色を見ても、どんなに可愛らしい洋服を見つけても、彼女に伝えることはできない。気持ちを伝える手段は、言葉や、匂い、触感といったところだろうか。でも、目で見なければわからないものは、伝えようがない。

一言も口を利かなかったあの子の顔が浮かんた。女性に何か言われても、あの子はただうなずくくらいだった。僕の問いかけにも口を割る気配はなかった。

僕は、いたたまれない気持ちになって、頭を下げ、すぐにその女性と別れた。梅雨はまだ明けそうもない。僕は、今にも降り出しそうにどよめく雲のうねりをにらみつけた。そして、じんわりと汗をかいた首元のシャツをばたばたとさせながら、どこへ行くともなく、固いコンクリートの道を急いだ。

第5話

「青木、こっち」

自動車の車体の下から、でかい声が響いた。僕は、油がついた頬をぬぐいながら、言われた通りのことをすることだけに集中した。いつもそんな調子だった。上の人間に言われるがまま動くことばかりだった。

高校を出てすぐにこの工場に勤め始めた。給料もまあまあいただいているわけだし、何とか生活するには十分な給料だったから、不満を言うことも、仕事を変えようと思うことも特になかった。ただ、たまに、常に受身である自分に嫌気がさすこともあった。

「青木」

また誰かが名前を呼んだ。

「お客さんだ」

僕は、仕事の手を一端止めて、工場の入り口へ走った。たまに、母親が心配して工場にやって来ることがあった。父親と僕の仲が良くないことを知っている母親は、僕に会いに来るときはたいてい、工場かアパートへ連絡もなしにやって来る。

しかし、その日のお客は違った。

「こんにちは」

白髪の女性だった。僕は、無言で頭を下げた。

「お昼休み、一緒にランチでもいかがかしら」

カーキ色の薄汚れたつなぎのまま、僕はあの女性と小さなレストランに入った。アンティーク調の落ち着いた雰囲気店内に、僕の汚い服装は不釣り合いだった。しかし、女性は特に気にする様子もなく、メニューを眺めている。僕は一口水を飲み、彼女と同様、メニューに目を落とした。

「彼女と一緒にじゃないんですか？」

僕はわざと明るく言った。女性は、首を横に振る。そして、ウェイトレスを呼んだ。

「私、Aのパスタをいただくわ。あなたはどうかさるの？」

女性に促され、僕はカレーライスを頼んだ。特別お腹が空いているわけではなかったし、財布と相談すると、高価なものは頼めそうもなかったのだ。

「残してきたわ」

僕は、一瞬何のことかと思った。

「あの子、私のこと嫌いだから」

その言葉で、ようやく彼女のことだと気付いた。

「私とは喋りたがらないし、私もあの子と喋るのは苦手なの」

コーヒーの香りがつんと鼻をついた。厨房の方から、鍋や食器の触れ合う音が響いてきた。女性は、自分の白髪が窓に映るのを見て言った。

「私、何歳に見えるかしら？」

僕はしばらく考えてから、適当に、五十過ぎくらいだろうかと答えた。あまり多く年をよみすぎても失礼だし、かといって若すぎても不自然だ。女性からの年齢についての質問は、難しい。僕の答えを聞くと、女性は笑いながら言った。

「こう見えても四十三なのよ」

「すみません」

思わず謝った。四十三歳という若さが信じられなかった。真っ白な髪と、目尻のしわは、明らかに四十代の女性のものではないように思われたのだ。

「あの子に会ってからなの」

女性はおしぼりで手をふきながら言った。

「この髪も、顔のしわも」

ウェイトレスが、二人の前にパスタとカレーライスを運んできた。テーブルの端に伝票を置くと、小さく礼をしてカウンターに戻って

いった。女性はスプーンとフォークを手を持ち、器用にパスタを絡めて口に運んだ。その光景を、僕が間の抜けた顔で眺めていると、彼女はこちらを見て、食べるようにすすめた。僕は急いでスプーンを手にし、カレーライスを口に押し込んだ。思ったよりもルーは辛かった。僕はコップの水を一気に飲み干した。ウェイトレスがやって来て、僕のコップに冷水を注いだ。

「あの名刺」

女性は、パスタを絡める手を止めてささやいた。

「どうか、捨てないでね」

その声は、店内に流れる微かなBGMにすらかき消されるほど小さな声だった。僕は、何とか彼女の唇の動きと、曖昧な発音から、言葉を理解した。

「私は、あの子に殺されてしまうかもしれない」

僕は、口に運びかけていたカレーライスを、危うく膝の上に落としそうになった。

「もうだめ。 私一人じゃ、どうにも……」

女性は、白髪をくしゃっと握ると、手元にあったナプキンで口元を拭った。

「ごめんなさい。 もう行くわ。 お会計は済ませておくから」

早口にそう言うと、僕が何か言う前に、テーブルの上の伝票をひらひらさせながらレジのところへ歩いていってしまった。彼女が注文したパスタは、一口二口手を付けただけで、まるまる残っていた。僕は、ポケットから財布を取り出し、先週の日曜にもらった名刺を探した。

『葛西圭子』

黒いはっきりとした活字で、名刺の中央にそう書かれていた。

「そういえば、あの子の名前、まだ知らないな」

冷め切ったカレーライスを口に運びながら、僕は夢の中にいるような妙な浮遊感にとらわれた。あの子に会ったことも、白髪の女性のことも、夢のように思われた。現実と夢との境が、分からなくな

っていた。

女性の台詞が、頭にこびりついていた。“殺される”とはどういう意味だろう。僕は、とりあえず、次の日曜も、あの豪邸へ出向こうと思った。特に深い理由はなかった。しいて理由を言うのなら、興味があつたから。それが一番適切な表現に思われた。

コーヒーの香りが鼻をついた。腕時計を見ると、休憩時間はあと十分ほど終わるところだった。食べかけのカレーライスを残したまま、僕はレストランを後にした。何となく、もうこのレストランに来たいとは思えなかった。

第6話

金曜日。僕は、仕事を一通り済ませたあと、仕事仲間と飲みに行く約束を交わしていた。僕よりも年上の人たちばかりだったから、居酒屋へ繰り出すのは少しだけ気が引けるものがあった。

「青木は今晚来れるんだろ？」

「ええ、まあ……」

曖昧な僕の返事に対し、三歳年上の瀬戸さんが笑った。

「青木は最年少だからなあ。 オヤジの会話にやついて行きづらいんだろ」

「いや、そういうわけじゃないですよ」

携帯電話をいじりながら、十年以上のベテランである山本さんは尋ねた。

「高校卒業してすぐだったっけか。 おまえが来たの」

「山さん、奥さんからメールですか？」

山本さんは照れくさそうに頬をかきながら、携帯電話をパチンと閉じた。

「いつまでも新婚気分でもいいですねえ」

周りの人数人にかかわれて、山本さんは耳まで赤くなっている。僕は、どうしてここまで人を愛せるのだろうか、山本さんを見ているといつも不思議になる。奥さんと子供の話をする山本さんの瞳は、いつも優しくかった。そのことが、僕には理解できなかった。

「おまえ、けっこうかわいい顔してるんだからさあ」

瀬戸さんは僕の頭を小突きながら言った。

「女の一人や二人くらい引っ掛けて来いよ」

僕は笑いながら、黙って首を横に振るだけだった。

夜の12時。僕らはひとしきり居酒屋で飲んだ後、その場で解散

することになった。僕は、もともと酒が強い方ではなかったので、大して飲むこともなく、酔うこともなかった。

「氣いつけて帰れよ」

山本さんは、仕事仲間全員にそう声をかけてから、また携帯電話を開いた。

「奥さん、お怒りですよ」

瀬戸さんをはじめ、周りの人はまた山本さんをからかった。そんならかいに対し、山本さんはいつも照れくさそうに笑う。決して怒るようなことはなかった。

「じゃあ、おやすみ」

酒でわずかに赤く染まった頬をゆるませて、山本さんはみんなに軽く手を振った。周りはみんな、気持ち良さそうに夜の空気を吸い込みながら帰路についた。僕は、赤信号で立ち止まりながら、服にこぼした焼き鳥のタレを気にしていた。そして、ふと、みんなはどこへ帰るのだろうかと考えた。自分のアパートだったり、家族の待つ家だったり……。何かしら、彼らには帰る場所がある。しかし、僕にはそれがなかった。古びた安アパートは、どこか僕を排除しようとするような空気を感じられる。少なくとも、僕を迎え入れてくれるような優しさはまったくない。

信号が青に変わった。奇怪なブレーキ音を立てて、ぎらぎらのライトを灯した自動車が止まった。ちょうど、早く行ってしまえと、僕を急かすように思われた。

「僕の居場所」

それだけばやくと、僕はまた、古びたジーンパンの裾を引きずりながら歩き出した。

気付けば、あの豪邸の前に来ていた。ちょうど、仕事場とアパートの中間地点にある豪邸は、仕事帰りに、その前を通ることが容易なものだった。今まで気付かずに通り過ぎていたが、僕は、この家

に住むあの白髪的女性——葛西圭子さんのことも、目の見えない彼女のことも、何も知らなかった。電灯の淡い光に照らされて、腕時計は12時半を指していた。

豪邸に並ぶ窓からは、明かりは一切漏れていなかった。人の住む気配すらしなかった。彼女は、本当にこの豪邸の中にいるのだろうか。僕は、目を凝らして家の中を見ようとして、思いとどまった。たとえば僕がどんなに視線を送ったところで、あの子は僕に気付くことはない。

豪邸を後にし、僕は真っ直ぐにアパートへ向かった。心がわずかにきしんでいるのに気付いた。あの子のことを考えると、いつも心がきしむ。恋愛とか、彼女の目が見えないことに対する同情とか、そんな感情とはまた違うように思われた。

アパートの鍵を開けたとき、僕は軽い吐き気に襲われた。急いでトイレに駆け込み、胃液を吐いた。大して飲んだわけでもないのに、気分は最悪だった。部屋の片隅で針を振るわせる時計の規則的な音だけが、耳の鼓膜を刺激していた。手足の感覚を忘れたように、僕は、トイレの入り口に座り込んだ。頭の中が、空洞になってしまったように感じられた。

第7話

約束の日、僕は前と同じように、穿き古したジーンパンを引きずりながら、あの豪邸へ向かった。あえてあの豪邸に見合うような服装をしようなどという気の利いた考えは持たなかった。そんな考えを持ったところで、貧しい独り暮らしをする僕がきちんとした服を持っているわけはなかったし、実際、服装にいちいちお金をかけることを面倒に感じていたのだ。

サザンカの植木が並ぶ歩道を通り、レンガ造りの立派な壁の前に差し掛かると、見覚えのある女性の姿が目に入った。白い杖を大切にそうに抱え、その女性はじっと身を固めて立っている。まぎれもない、あの子だった。

僕は、わざと足音をたてないようにして近づいた。しかし、彼女はすぐに僕の存在に気付いた。そして、ゆっくりと細い手を伸ばした。僕は、彼女の小さな白い手を握った。彼女は安心したように微笑むと、僕のシャツの端を、もう片方の手で強く握った。そのときに、手にしていた杖は地面に転がり落ちた。カランという頼りない音をたてて、杖は数十センチだけ離れたところへ転がった。

「落ちたよ」

僕がそれを拾おうとして身をかめようとする、彼女はいやいやと言うように首を横に振り、身体を固くして僕に近づいてきた。まるで、母親から離れるのを嫌がる子供のようだった。彼女の幼い一面が、一瞬、すごくいとおしく感じられた。

「中に入らないの？」

彼女は、僕の質問に、ただひたすら首を横に振る。

「入りたくないの？」

僕が聞くと、彼女はうんとうなずいた。

「このまま、どこかへ散歩に行こうか」

冗談交じりにそう言うと、彼女は勢い良く首を縦に振った。僕は、

どうしたものかと考え込んでしまった。行く当てなどないし、目の見えない彼女を連れ歩くということは、何かしらの責任を負うということになる。しかし、当の本人は、すでに行く気満々のようだった。仕方なく、僕は彼女と一緒に散歩に出ることにした。転がったままの杖を拾い、彼女に渡した。彼女は、それを受け取りかけたが、すぐに僕に押し返した。

「どうしたの？」

「いない」

「どうして？」

僕が問うと、彼女は微笑んで言った。

「あなたがいるから」

僕は、ますますの責任の大きさを感じた。僕が彼女の目の代わりにならなくてはいけないのだ。しかし、彼女は嬉しそうに笑っている。

「じゃあ、これはここに置いていくよ」

彼女の笑顔を曇らせるのは悪い気がして、僕は彼女の考えを受け入れることにした。真っ白な杖をレンガの壁に立てかけ、僕は彼女の手をしっかりと握った。雨は夜のうちに上がり、今日は久々に青空が見られたが、水たまりはまだ少し残っていた。

「水たまりがあるから、気をつけて」

僕がそう言うと、彼女は腕を組んできた。微かに、彼女の柔らかな胸の感触が腕に当たった。思わずどきりとした僕をよそに、彼女は言った。

「どこへ行くの？」

「わからないよ。散歩に行く予定なんて、立ててなかったんだから」

それを聞くと、彼女はまた笑った。無邪気な顔だった。僕は、彼女と腕を組んだまま、ゆっくりと一歩ずつ歩いた。彼女は、僕に寄りかかりながら、少しでも不安げに、でもどこか期待を抱えながら歩いているようだった。

第8話

サザンカの通りに沿って、僕と彼女は、街頭を何本も通り越した。空の雲の波間から、少しだけ青空が覗いた。白く澄んだ光が、サザンカの葉に当たってきらきら光った。

「ねえ」

僕は、彼女に質問をした。

「君は、どうして家に入りたくなかったの？」

彼女は、しばらく何も言わなかった。まずいことを質問してしまったと、僕は後悔した。しかし、彼女ははっきりとした口調で言った。

“君”じゃないわ」

僕は思わず彼女の顔を見た。ずっと整った鼻立ちと、化粧つけない白い肌が印象的だった。彼女ははっきりと、けれど優しい口調で続けた。

「さくら」

「さくら？」

僕が繰り返すと、彼女はにこりと微笑んでうなずいた。

「さくら……」

彼女の名前を何度もつぶやく僕に、彼女――さくらは尋ねた。

「あなたは、青木……下は、何ていうの？」

僕のシャツの袖をぎゅっと握り、さくらは不思議そうな顔をした。僕は、ゆっくりと言った。

「雄司。あおきゆうじ 青木雄司」

「ゆうじ」

さくらは、嬉しそうにその名前を呼んだ。すると、急に立ち止まって言った。少しだけ、深刻そうな顔をして。

「ゆうじと私は、お友達になれるかしら」

僕は、間髪入れずに答えた。

「もうなってるだろ」

「え」

「お互いの名前を知ってて、こうして一緒に散歩もしてる。だから、もう立派な友達だよ。違うかな？」

少し臭い台詞を吐いてしまったなど、気恥ずかしい思いで顔をうつむけている僕に、さくらは、ふふつと笑うと、ぎゅつと抱きついてきた。僕は思わずよろめいた。彼女の肌の甘い香りが、とても優しかったから。さくらの身体は、細くて軽かった。こんな身体で、よく今まで生きて来られたものだと思う。今までにも、驚くほど細い女の子は何度も見かけた。しかし、彼女は、今までの誰よりも細いようだった。

一瞬、彼女には、僕には見ることの出来ないとても美しいものが見えているんじゃないかと思われた。彼女の瞳は、きつと見えていないはずなのに――何か、透き通るように美しいものを捕らえているように思われて仕方なかった。

第9話

僕はそのまま、さくらを連れて、初めに会ったときの公園へ行った。他に行き先もなかったし、遠出することはさすがにできないと思ったからだ。一番大きな木の下にある、淡い緑色のベンチに座った。

「ケガ、もういいの？」

さくらは、僕の問いかけに、うんとうなずいた。そして、膝を軽く覆うくらいの丈の紺色のスカートを、膝の少し上までたくし上げた。薄茶色の絆創膏がぺたりと張り付いていた。さくらはその絆創膏を、爪に引っ掛けて無造作にはがした。絆創膏のせいで、肌が蒸れて少々白っぽくふやけていた。さくらは、傷口にそっと触れた。傷は、かさぶたになっていた。

「見て」

さくらは、僕にケガをした膝を見せた。

「もう治りそうだね」

うん、とうなずき、さくらはスカートをまたもとの位置まで下ろした。彼女の脚は、やはり細かった。僕は、何だか不安になった。風が吹けば、彼女が吹き飛ばされてしまうような気がした。

「お腹空いた」

わざと僕はそう言った。携帯の時計は、11時半少し前になっている。僕は、朝ごはん昼ごはんが兼用になる癖だったので、この時間帯は特にお腹が空く時間だった。けれど、さくらの細い身体を見ていると、とにかく何か食べさせたいという考えばかりが浮かんできたのだ。

「何か食べに行こうか」

言っと、さくらは首を傾げて言った。

「それはデートのお誘い？」

それから彼女はくすくすと笑い出した。僕は、どう返事を返して

いいのか分からなくなった。僕が何も言わないので、さくらは笑いながら言った。

「冗談よ。 うん、行きましょう。 私もお腹空いてきたから」

そして彼女は立ち上がった。僕も続いて立ち上がり、彼女の手を握った。彼女は、またさっきのように腕を組んできた。

「落ち着くの」

さくらのその言葉に、初め、僕といるのが落ち着くのかと思ったが、すぐに、腕を組むことに対してなのだと気付いた。

「そっか」

僕はそれだけ言って、さっきと同じようにゆっくり歩き始めた。薄緑色のベンチがだんだんと遠ざかる。僕は、彼女の顔を、もっとじっと見たいと思った。腕を組んだまま、彼女の顔を覗き込んだ。しかし、彼女は顔も僕の腕に押し付けて寄りかかっている形だったので、うまく顔を見ることが出来なかった。

公園を出ると、近くで自動車のクラクションの音が響いた。僕もさくらも、びくっと身体を振るわせた。音のする方を見ると、ボール遊びをしていた子供が、ボールを追いかけて飛び出す寸前のようなだった。運転手が窓から身を乗り出し、何か子供に叫んでいる。

「なあに？」

「子供の飛び出しだよ。 運転手がキレてる」

「大きな音。 びっくりした」

さくらは自分の胸のあたりに手のひらを当てた。僕も、いきなりこのことに驚いて、心臓が激しく鼓動を打っているのが分かった。けれど、自動車のクラクションの音のためだけにしては、やけに激しいと思った。

出会ったばかりのときは何も思わなかったが、今、僕は、さくらの“女”としての特性を、強く意識し始めていた。ふわりとした柔らかな胸、真っ白でなめらかな肌、さらりとした長い髪。そして、明らかに男のものとは違う、小さくて華奢な腕。それらはすべて、僕の“男”としての感性を刺激していた。

好きになっっているのだろうか、僕は何度も自分に問いかけた。
もちろん、答えなど出ない。ただ、今はさくらのこの手を離しては
いけないとだけ感じていた。

第10話

「何が食べたい？」

公園を出た通りで、信号を待ちながら僕は尋ねた。さくらは、しばらくじっと考え込み、それから大きな声で言った。

「ハンバーガーが食べたい！」

「ハンバーガーでいいの？」

「食べたことないから」

「食べたことないの？」

驚いた。僕もそんなにハンバーガーなんか買う方じゃないけれど、食べたことくらいはある。それに、僕の知り合いに、ハンバーガーを食べたことのない人はいない。

「変？」

さくらは、恐る恐る言った。

「一度も食べたことないの、おかしい？」

僕は首を横に勢いよく振って言った。

「ううん、全然。変なんかじゃない」

それを聞くと、さくらはほっとしたように笑った。

「ここの通りまっすぐいったところにあるから、そこでいい？ あ、

段差。 気をつけて」

信号が青になり、歩き出しながら僕は言った。さくらは嬉しそうにうなずき、僕の腕に頬を寄せた。僕は一瞬、他の人から見たら、僕らは恋人同士に見えるだろうかと考えた。そう考えると、少し照れくさくなった。一方のさくらは、相変わらず楽しそうに僕の腕を抱えている。彼女は純粋なんだと、改めて実感した。

僕は、ファーストフード店の前まで来ると、足を止めた。

「ここだよ」

「不思議な匂いがするのね」

さくらは、鼻をひくひくさせて言った。フライドポテトの香りがかすかに鼻をついた。僕は、入るよ、とさくらに言くと、自動ドアの前に立った。機械の音を立てながら、自動ドアが両側に開いた。入ってすぐのカウンターが、運良く空いていた。休日のわりには、めずらしく客が少ない。

「何がいい？」

「選んで」

「選んで……って言われてもなあ」

「じゃあ、ゆうじと同じのがいい」

さくらは無邪気に笑って言った。僕は仕方なく、自分が食べたいものを、二人分注文した。支払いを済ませ、注文したものが出て来る間、僕はさくらに尋ねた。

「いつもどんなものを食べてるの？」

「わからないわ」

わからない？ 彼女は何を言っているのだろうか。

「甘かったり、しょっぱかったり。……いろいろ」

僕には、理解できなかった。あの葛西さんが、さくらに食事を作ってくれるのだと思っていたが、“わからない”とはどういうことなのだろう。僕は、もう一度尋ねてみた。

「葛西さんが作ってくれるんでしょう？」

さくらは、その名前を聞くと、それまでにこにこしていたのが、一気に沈んだような表情になった。そして、口を閉じてしまった。そのとき、僕が前に葛西さんに言われた言葉がまた蘇った。気まぐれのまま固まっていると、目の前に注文したものが置かれた。僕は、彼女のご機嫌を取るつもりで、わざと明るく言った。

「ほら、ハンバーガー。初体験なんだから、もっと嬉しそうにしろよ」

しかし、さくらは少し頬を緩めただけで、未だ固い表情を崩すことがなかった。僕は戸惑いつつも、さくらを連れて、空いている席に座った。もう、彼女の前で、葛西さんの話題を出してはいけない

ような気がした。その理由ははっきりしなかったが、葛西さんの言った言葉と、さくらの表情から、何となく、そう思ったのだ。

席について、僕が一息ついたとき、周りからひそひそ声が聞こえてきた。“あの子、障害者かしら”。やはりわかるものなのだろうか。そのとき、僕の頭には、“差別”という言葉が浮かんた。周りがどう彼女を見ようと、僕は少なくとも差別に値することはしてはいけないと思った。だから、何も気にしないように努め、僕はさくらに話しかけた。

「はい」

ゆつくりと、さくらの手に、ハンバーガーを持たせる。

「このまま、かじってごらん」

「かじる？」

「そう、かじる」

さくらは、ゆつくり、ゆつくりと口を近づけ、ハンバーガーの端をかじった。そして、口を動かし、ハンバーガーを咀嚼する。僕は自分の食えることなどすっかり忘れ、さくらの動きにだけ注目していた。さくらは、ようやく一口分を飲み込むと、何も言わずに、次の一口をかじった。そのかじった分を飲み込むと、また間髪入れずにかじり出した。それを見て、僕は思わず笑った。彼女の必死にハンバーガーをかじる姿が、まるで、お腹を空かせた子犬のように見えた。

「ポテトは？」

「ポテト？」

僕は、フライドポテトを一本抜き取り、さくらの口元に寄せた。

「口、開けて」

さくらは大きく口を開けた。ハンバーガーの食べかすがかすかに残っていた。しかし、僕はそんなことは気にせず、彼女の口の中にポテトを放り込んだ。さくらは、ハンバーガーのときと同じように、まずはゆつくりと噛み締めていた。

「もっとちょうだい」

ポテトを飲み込んでしまうと、さくらは僕を急かした。僕は何だか嬉しくなって、また、彼女の口元にポテトを運ぶ。彼女は、ハンバーガーを片手に、僕の手からポテトを食べた。

さくらは、僕が想像していたよりも、たくさん食べた。ハンバーガーは一つ簡単に平らげてしまったし、フライドポテトもすぐになくなってしまった。そして、コーラを飲みながら、満足げに唇を舐めた。

僕は、すっかり自分が食えることなど忘れていたから、さくらが一通り食べ終えてしまったのに気付いて、焦って自分の分を手をつけた。

「ハンバーガーって美味しいのね」

「うん？ ……まあ、美味しいっていうか」

「美味しくないの？」

さくらは、不思議そうに言った。

「ハンバーガーってのはさ、つまり…：ファーストフードだから、あんまり身体にいいものは入ってないと思うけど」

「でも、美味しいからいいのよ」

トレイを手で探りながら、さくらは飲み終えたコーラのカップを置いた。カップから、しずくが一滴垂れて、テーブルに落ちた。僕は、さくらが次に言う言葉を待ちながら、ハンバーガーの最後の一口けらを口に入れた。

「美味しいから、みんな好きなんですよ。中に何が入ってるかなんて、誰も気にしないのよ」

さくらがそう言ったとき、僕は、このファーストフード店に客足が増えてきたことに気付いた。僕らが入ってから、小一時間が経過したところで、急にお客がたくさんやってきたのだ。若いカップルもたくさんいたし、小さな子供連れも、少し年のいったおじさんもいる。

僕は、フライドポテトをかじりながら、その光景を眺めた。

「ねえ、ゆうじはどこに住んでるの？」

「君の家から十分くらい歩いたところ」

「近いのね」

僕は、うんとうなずきながら、携帯の時計を見た。葛西さんは、さくらのことを心配していないだろうか。そろそろ店を出て、さくらを送り届けた方がいいと思った。僕がそのことを口にしようとした瞬間、さくらはそれを遮るように言った。

「ゆうじの家に行きたい」

「僕の家？」

さくらはにこりと笑いながら首を縦に振る。僕は頭を掻きながら、何と答えればいいのか悩んだ。

「だめ？」

そこで、素直にだめだと言えば良かったのに、僕はさくらの顔を見た。とたん、だめだと言えなくなってしまった。

「きれいじゃないよ」

僕は苦し紛れにそう言ったが、さくらはふふっと笑った。

「見えないから、大丈夫よ」

しまったと思う、思わずゴメンとつぶやいてしまった。さくらは何も気にしていないように、相変わらずにこにこ笑っている。彼女の目は見えないのだと、僕は何度も自分に言い聞かせた。目の見える普通の人と同じような扱いをして、彼女を傷つけたらと思うと、僕はとても辛い気持ちになる。

そこまで考えて、僕はふと思いとどまった。“目の見える人間”が普通と表現するのなら、“目の見えない人間”はどう表現すればいいのだろうか。そもそも、普通の人間というのは、どんな人間なんだろうか。

「ゆうじ？」

黙りこんでいると、さくらが僕の名前を呼んだ。僕は、何？と返事をする。

「何も言わないから、黙って帰っちゃったのかと思った」
安心したように彼女は言った。

「来る？」

僕は言った。さくらは、首を傾げる。

「僕のアパートに」

それを聞くと、さくらは嬉しそうにうなずいた。僕は、そのとき、わずかに心がきしんでいるのを感じた。やはり、恋愛でも同情でもない、別の理由がある。僕は、自分が何かしらの感情をさくらに対して感じていることはわかっていた。けれど、その感情がどんなものなのか、未だによくわからない。

席を立ち上がり、さくらの手を握ると、彼女も立ち上がった。僕は、ハンバーガーの包み紙などが載ったトレイを持ち、帰り際にゴミ箱に捨てて行った。カシャンと、頼りない音をたて、コップに残った氷がゴミ箱の中に沈んでいった。

さくらは、しっかりと僕の腕に自分の腕を絡めた。少しだけ、周りの視線が気になった。やけに人に見られている気がしてならなかった。

「ゆうじ？」

また、さくらが僕の名前を呼ぶ。何故か、うまくそれに答えてやることができなかった。

第11話

僕は、アパートへ続く道をさくらと一緒に歩きながら、こっそり財布からあの名刺を取り出した。『葛西圭子』の文字がくっきりと印刷された下に、自宅のものであろう電話番号と、090から始まる携帯番号があった。

さくらがどうして葛西さんの話題を嫌がるのか。葛西さんの言っていたとおり、さくらは葛西さんが好きではないのだろうか。しかし、そんなことを本人に尋ねることなどできるはずもない。

財布をしまい、携帯の時計を見た。一時半を回っている。これくらい時間、明るさなら、何とか夕方までには彼女を送り届けることができると思った。幸い、今日が梅雨明けの宣言を出された日だったので、雨はもうしばらく降りそうもない。入道雲が、空の奥で波打っているだけだ。かすかに、蝉の声もする。

「夏ね」

さくらがつぶやいた。僕は驚いた。調度、彼女は僕と似たようなことを考えていたらしい。

「夏だね」

僕も同じようにつぶやいた。蝉の声が少し大きくなった。風が吹いた。通りに植えられているイチヨウの葉をざわざわと揺らし、それと一緒にさくらの長い髪もさらさらとなびいた。石鹸の優しい香りがした。

「蝉のお話」

さくらは、頬にかかった髪の毛を指でどけながら言った。

「蝉？」

「あのね」

まるで、絵本を読むかのように、彼女は一言ずつ、丁寧に話し出した。

「蝉のいのちは、たったの一週間なの。だから、蝉にとっては、

ほんの一秒だって休めないの。 いっぱい鳴いて、いっぱい子孫を残すために、一週間の間、ずっと、ずっと生き続けるの」

一瞬、蟬の声が止まった。あたりの木がわずかにざわめいた。入道雲が頭を持ち上げる。空を、鳥が横切る。僕は、どこかとても遠いところに来たような錯覚に捉われた。

「昔、小さな女の子がいたの。 麦藁帽子をかぶって、いつもあっちへ行ったり、こっちへ行ったり。 家の中でじっとするのが大嫌いだっただの。 夜はいつもうずうずしていたわ。 闇の中で、独りぼっちで布団にもぐっているのが耐え切れなかった。 だから、お日さまが顔を出すと、女の子はすぐに布団から這い出て、麦藁帽子を頭に載せて、家を飛び出すの。 女の子は、夏の公園が大好きだった。 でもある日、女の子のママが死んでしまったの。 それも、女の子が、公園に行って、蟬の声を浴びながら、くるくる回って楽しんでる間に。 だから、女の子は公園へ行くのをやめたの。」

大好きな公園は、女の子の大好きなものを奪ってしまうものだったから。 ママが死んだのは、夏に入ったばかりの、ちょうど、今日みたいな日だった。 蟬が鳴き始めて、木の幹やら枝やらがにぎやかになったところのことだった」

「それは本当にあった話？」

さくらが一息ついたころ、僕はそう聞いた。彼女は、かすかに微笑しただけだった。

「夏が終盤になって、蟬が少しだけ声を低くし始めたころ、女の子は公園へ出かけたの。 とても久しぶりに行った公園には、知らない子どももたくさんいて、女の子はこのグループにもなじめなかった。 でも、前と同じように、ベンチに座って、風を飲んで、砂場を裸足で歩いたり、ブランコを空高く揺らしたりしていたの。」

しばらくして、女の子の頭の上を、一匹の蟬が音をたてて横切った。 蟬は、女の子の頭の上で、ジジジ…って言うと、ぽんと目の前に落ちた」

信号が赤になった。僕が立ち止まると、さくらも足を止めた。信

号が青に変わるまで、さくらは何も言おうとしなかった。僕も、何となく黙っていた。彼女が話したのを待っていた。

ようやく信号が青になって、僕ら二人が歩き出すと、彼女はそれと同時に話し始めた。

「女の子は、その蟬を指でつまみあげた。蟬は、鳴くこともなく、逃げ出そうとすることもなく、硬くなって、女の子の指の間で死んでた。女の子は、どうして蟬が死ぬのか、わからなかった。お母さんが死んだときも、どうして死んだのかわからなかった。女の子は、一瞬、どうして自分が生きているのかわからなくなって、何だかとても恐くなった。蟬をその場に置いて、女の子は家に走って帰った。恐くて、恐くて、でもそれを一人じゃどうにもできなかったの」

さくらは、そこで話すのをやめた。

「おわり？」

何だか中途半端な終わり方だと、僕は思った。

「中途半端でしょ」

また、さっきと同じように、さくらは僕と同じことを考えていたらしい。僕は、心の底を読まれているような気がした。

「まだ途中かけなの」

「途中って？」

「まだどうやって締めくくろうか、考えてないのよ」

そう言って、さくらは照れくさそうに笑った。

「このお話、公開したのは今日が始めてなの。ゆうじが初めてのお客様ね」

「君が作ってたってこと？」

さくらはためらいがちにうなずいた。驚いた。さくらは、頭の中だけで、こんな話を作り、記憶していたのだろうか。

「作家になれるよ」

僕は言った。おせじではなかった。本気でそう思った。さくらは、首を横に振って、笑っている。そのとき、彼女は地面に落ちていた

小石につまづいた。

「きゃっ」

僕は思わず、彼女のお腹のところに手を回し、彼女を抱きかかえる格好になっていた。そのとき、彼女の頬と僕の頬が軽く触れた。さらりとした柔らかな肌の感触が、僕の頬に残った。

「ごめんなさい」

「僕がすっかりしてなかったから。大丈夫？」

さくらは、僕からそっと離れると、うん、と小さくうなずいた。僕の目には、その一連の仕草のせいで、彼女が幼い少女に見えた。

「アパート、もうすぐだから」

僕はそう言って、さくらの腕と自分の腕を組んだ。さくらは今までと同じように、しっかりと僕の腕に寄りかかる。一方の僕は、何を言えばいいかわからないまま、彼女と腕を組み、アパートへ真っ直ぐに向かった。

向かう途中、僕は何度も心の中で繰り返していた。

——彼女を“意識”してしまった

そう、確かに僕は、彼女を女性として強く意識していた。

第12話

深い住宅街に差し掛かり、見通しの悪い大きなカーブミラーの角を曲がると、僕のアパートが見えてきた。薄いクリーム色の壁をした、二階建ての小さなアパートだ。壁はたいして厚くないし、新しいというわけでもない、ただ家賃が安いのが魅力のアパートだ。僕は正直このアパートが好きではなかった。

「着いた」

さくらに言うと、彼女は嬉しそうに言った。

「中、入ってもいい？」

「いいけど」

僕は勢いでそう答えていた。すぐに付け加えた。

「でも、ちょっとだけだよ」

「大丈夫」

さくらははっきりとそう言って、僕に早く部屋に連れて行くように急かした。僕は、ポケットから鍵を取り出し、二階の自分の部屋へさくらを連れて行くことにした。階段の目の前に来て、僕は念のため尋ねた。

「階段、上れる？」

「上れるわ」

僕は、彼女の腕をしっかりと支えながら、階段を一段ずつ上がった。さくらは、思ったよりも慣れた様子で階段を上った。

「これで最後の一段だからね」

そして、最後の一段を上り終わり、ようやく二階へ到達した。二階の廊下は、チラシが捨ててあったり、壊れたビニール傘が放置してあったり、生活している人のだらしなさが垣間見えているようだった。僕の部屋は、奥から三番目だった。鍵を開け、ドアを開けた。散らばっていた靴を下駄箱へ押し込んだ。

「どうぞ」

「おじゃまします」

慎重な様子で、さくらはそう言った。僕は思わず笑った。

「どうかした？」

「いや、何でもないよ」

さくらは、ゆっくりと靴を脱ぎ、僕の部屋に上がった。そういえば、女の子を入れるのは、これが初めてだった。初めて部屋に上げる女の子が、盲目の少女だなんて、何だか不思議な気分だった。

「狭いから気をつけて」

キッチンと風呂場に阻まれて、玄関から続く廊下は、人が一人通れるくらいの幅しかなかった。僕は、彼女の後ろに続いた。彼女は、キッチンの流し台を横切ったときに、笑って言った。

「ちゃんと自炊してるのね」

僕は、どうしてそんなことが分かったのかと、流し台のあたりを覗き込んだ。昨日の夜作ったカレーの鍋が、狭い流し台の中でそのままになっていた。匂いで分かったのだろうか。

「外食って高くつくから」

さくらは、そう、と言いながら、奥へ入っていった。彼女を後ろから見てみると、何だか抱きしめたくなくなる。僕は、その感情をこらえながら、黙って彼女の後から部屋に入った。

「ここが部屋」

六畳の小さな部屋だ。一人で暮らす分には十分だけれど、やはり狭いと感じていた。このアパートが好きではない理由の一つがそれだった。さくらは、立ったまま、何もせずにじっとしていた。僕は、彼女の手を取り、壁にもたれかかれるように座らせた。僕も隣に、同じように座った。狭いアパートで、椅子なんかなかったから、これくらいしか座ってもらう方法は浮かばなかった。ベッドは置かずに敷布団にしていたし、実際、家具も必要最低限のものしか置いていなかった。カラーボックスが一つと、中古で買ったテレビ。それに、友人からゆずってもらった小さなテーブル。あとは小さなタンスだけ。

開けっ放しにしておいた窓から、風が吹き込んできた。唯一のこのアパートのいいところといえば、風通しがいいことくらいだろう。彼女は、気持ちよさそうに一つあくびをした。

「眠い？」

「ううん」

蝉の遠い声を聞きながら、僕はようやく彼女の顔をしっかりと見ることが出来た。

「寂しくないの？」

さくらはふいに聞いた。

「一人暮らし、寂しくないの？」

正直、僕は孤独を感じていた。特に、この部屋にいるときは。でも、何故か今日はその孤独を感じていなかった。

「今日は、寂しくない」

「どうして？」

さくらは、鼻筋の通った、整った顔をしていた。長いさらさらの髪が、肩にかかって波打っていた。彼女は、こんなにきれいな顔をしていただろうか。

「わからない」

僕はそれだけ言うと、さっきさくらがしたのと同じようにあくびをした。窓から外を見ると、誰かの家の屋根が見える。犬と子どもの声がある。屋根の間から、空の青が見える。入道雲が膨れ上がるのもかすかに見えた。いつもと何も変わらない景色だ。そのいつもと同じ景色が、今日は少し違って見えた。

第13話

「ねえ」

彼女は言う。

「触ってもいい？」

僕は、何のことかと彼女の顔を覗き込む。

「顔に触りたいの」

「僕の顔？」

「触らせて」

さくらがあまりにそれを望んでいるようだったので、僕は、いいよ、とつぶやいた。すると、彼女は、暗闇の中を探るように、こちらにゆっくりと両手を差し出してくる。僕は、動かずじっとしていた。

ようやく彼女の手が、僕の顔に届いた。僕は一瞬身体を震わせた。

「大丈夫」

さくらははっきりと、けれどどこか優しくそうさやいた。そして、まず、彼女の両手は僕の両側の頬を包み込むように僕の顔に触れた。そこから、顎の輪郭、耳、鼻、まぶた、額と、彼女はまるで生まれたての子猫に触れるように、柔らかく、優しく手のひらと指を這わせていった。最後に、彼女の指は僕の唇に触れた。

彼女は、僕の唇に触れたまま、動こうとしなかった。僕は、抵抗する気はなく、目をゆっくりと閉じた。彼女の息遣いが聞こえた。

僕は、さくらの肌の匂いに軽く酔いを覚えた。一瞬、僕の思考が、その匂いと、外から吹き込んでくる心地よい風のせいで途切れたとき、唇に柔らかな何かが触れた。

あまりに一瞬のことで、僕はこの内容が理解できていなかった。間違いなく、唇に何かが触れた。指や手のひらではない、もっと柔らかいものが触れた。僕の曖昧な記憶が合っているのならば、あれは確かに――。

「ゆうじ」

さくらは、消えそうな声で僕の名前を呼んだ。

「帰りたくないの」

「え？」

ふわふわと宙に浮いているような気分だった僕は、さくらが何を言っているのかもよく分からなかった。彼女はもう一度言った。

「あの家に帰りたくないの」

あの家？あの豪邸のことか。そのとき、僕の頭に、また葛西さんの言った言葉が浮かんた。

「心配してるよ。 葛西さん」

「言わないで」

さくらは耳を押さえ、顔を伏せた。その行動からは、怯えのようなものが感じられた。

「独りぼっちは怖いのよ」

それだけ言うと、さくらは音もなく涙を流した。ぽろぽろとこぼれ、それは涙というよりは雨の雫のように見えた。僕は、そのとき、彼女のことを考えるたびに感じていた、胸のきしみの理由が分かった。

「独りは嫌い」

僕は、彼女の中に僕を見ていた。

「嫌いな」

さくらは、孤独を感じているらしい。僕もまた、理由のない孤独にさいなまれていた。この、おんぼろのアパートの一室で、話し相手どころか、生きる目的も、ガキのころの夢も、何もかも失っていた。きつと、現代人なら誰でも抱えている孤独なんだと思った。そう解釈していても、耐え難い気持ちだった。

僕は、震えるさくらの身体を抱いた。細かった。かけられる言葉は何もなく、ただ、彼女を抱きしめ、その頬にキスをした。さくらはまるで人形のようにじっとして、僕に身体を預けていた。今まで、女性とまともに付き合ったことのなかった僕だったが、何故だか迷

いはなかった。抱き方も、キスの仕方、自然と身についているようだった。

「ゆうじ」

さくらは、かすかに震えた声で僕を呼んだ。僕は、その声に驚き、思わずさくらを離れた。目の見えない彼女に、何てことをしたのだろう。それも、会って間もないのに。恋人でもないのに。

「ごめん」

思わず謝ってしまった。さくらは首を横に振り、ううん、と言った。

「ゆうじは、独りぼっちじゃないの？」

「僕？」

風が部屋を走りぬけた。さくらの髪が揺れた。

「この部屋は好きじゃないんだ」

「どうして？」

「僕のことを嫌ってるみたいなんだ。この部屋は」

どこかの部屋の風鈴の音が聞こえた。硬く冷たい音が、耳の鼓膜を妙に刺激した。さくらの息遣いが聞こえる気がする。身体中の神経が、やたらに過敏になっている気がする。

「ここに一人でいると、いつも苦しい。酸素が足りないみたいに」

「今も苦しい？」

僕は、いや、と言いながら首を横に振った。

「君がいるから」

さくらはそれを聞くと、しばらく黙っていた。そのとき、何故だか、騒音が何もかも消え去ったように穏やかになった。聞こえるのは、風の音と、彼女の息遣いだけだった。

第14話

「君が嫌じゃなかったら」

僕は、少し前から気になっていたことを聞こうと思った。自分のことを話すことが滅多になかったさくらに、彼女のことを尋ねるのは、賭けに近いものだった。

「君のこと、教えて欲しい」

興味本位なわけじゃない。僕は、さくらをもっと知りたいと思ったのだ。さくらは、困ったようにうつむき、それからゆっくりと言った。

「ゆうじから話して」

「僕？」

さくらはうなずく。

「ゆうじのこと、知りたい」

僕は、思わぬ返答に戸惑った。平凡な僕の今までを、どう伝えればいいのか。大して面白いはずもないのに。

「だめ？」

「だめじゃないよ」

話すことにした。僕の今までを。つまらないだろうけど。さくらが望むなら、僕はすべて話そうと思った。

「何から話そうか」

「何でも。全部話して。思いついたこと」

僕は、人に上手くことを説明するのが苦手だったから、こういうのは本当に辛いものがあつた。でも、きっとさくらは、どんなにかばかしい話を僕がしても、きっと黙って聞いてくれると思った。そういう、根拠のない確信があつた。僕は、さくらの言うとおりに、思いついたことを話した。

「親は、普通の会社員と、普通の主婦。僕も普通の人間。何も秀でたことなんてなくて、やりたいことも何もない。そんなふう

に今まで過ごしてきたら、本当に、“何となく”生きてる人間になつちやつたんだ」

「何となく？」

「そう、何となく」

僕は、たまに自分が生きているかどうか分からなくなることがあった。脈は確かにあるのに、何故か、自分が他のものに操られて動く、操り人形のような存在に思えるのだ。この部屋の天井の一点を見つめ、床の上に転がっていると、世界が崩れ落ちるのではないかというような錯覚にもとらわれる。……現代人にありがちな、一種の心の病気のようなものなのだろうか。

「だから、今は自動車の工場で、自動車の修理をしてる。高くはないけど、まあまあのお給料もいただけてるわけだし、“何となく”生きていくには十分だよ」

「ゆうじはそれで満足なの？」

さくらは言った。僕は、何と答えればいいのか分からなかった。何となく生きて、親より長生きさえすればそれでいいという回答もいいだろう。何となく生きるだけじゃ生温いから、不満だという回答だって。こんなものは人それぞれに答えがあるんだと思う。それなら、僕の答えは何なんだろう。

「わからないな」

「わからないの？」

「これでもいいと思うときだってあるし、これじゃダメだって思うときもある。だから、僕にとって満足かどうかなんて、いまいちわからないよ」

さくらはそれを聞いて小さくうなずいた。

第15話

さくらは、長い髪を、流れ込んでくる風に遊ばせていた。風がさくらの髪を揺らすたび、甘い香りが鼻をつく。そのたびに僕は、彼女を抱きしめたときの感触を思い出さずにはいられなかった。

さくらは、また僕に尋ねた。

「もう一つ聞いてもいい？」

遠くの空を、鳥が鳴き声をたてて横切るのが見えた。かすかに空が茜色に染まりだしている。アパートの狭い部屋は、少しずつ薄暗くなってきた。さくらの表情が、暗くてよく見えなかった。彼女は、顔の横に垂れた長い髪を耳に引っ掛けながら言った。

「独りぼっちだと思ったことは？」

さつきも、彼女が僕に同じ質問をしたのを思い出した。彼女にとって、“独り”というのは、重要な言葉なのだろうか。

「そんなの、しょっちゅうだよ」

「しょっちゅう？」

「仕事から帰ったあとは、妙に部屋ががらんとして、孤独で仕方ない。どんなに楽しかった日でも、一人になった途端に孤独が襲ってくる。ひどいときなんか、仲のいい友達と一緒にいるときだって、孤独を感じることがある」

僕の言ったことを、さくらは何度も頭の中で咀嚼そしゃくするように見えた。口の中で、何度か、“孤独”という言葉を繰り返している。それから、ふと思いついたように言った。

「私といるときは、寂しくないって言ったわよね」

「うん、言った」

「どうして？」

不思議なことに、僕は、彼女には何でも言えた。普段の僕なら決して言わないだろうことも、すべて。

「似てるからじゃないかな」

そう、僕は似ているんだ。初めて出会い、さくらのことを考えるたびに僕の胸がきしんだのは、彼女を見ていると、まるで僕自身のように思えたからだろう。

「私とゆうじが、似てるの？」

「見た目とか、性格とか、そういうのじゃないよ。もっと、深いところでさ」

彼女は暗闇の中、いつも孤独と闘っていた。僕は、光が見えていても、心に染み付く孤独を取り除くことができなかった。

「私もそう思ってた」

「君も？」

さくらは、わずかに微笑みながら続けた。空の闇が濃くなっている。さくらの微笑は、その闇の中でようやく見えたくらいだった。

「ゆうじは、すごく優しくて、でも、ちよつと悲しい」

僕には、彼女の言っている意味がすぐには理解できなかった。この意味を理解したのは、もう少しあとになってからのことだった。

「でも、大丈夫」

さくらは、急に声のトーンを上げた。まるで、空元氣のように思われた。わざと明るい調子で彼女は言う。

「私と違ってゆうじは目が見えるもの」

そのとき、部屋が真っ暗闇に包まれているのに気付いた。いつからこんなに暗くなったんだろう。夏になって、日が長くなったといっても、暗くなり始めたら一気だ。僕は、電気をつけようとして、思いとどまった。さくらと同じ、暗闇の中にいようと思った。そうすれば、彼女が言おうとする何かを捕らえることができるような気がした。

「私は出来損ないだもの。誰も私を愛してくれやしないわ」

窓から、とろけるような夕飯の香りが流れてきた。しかし、僕の胃は空腹感を覚えることはなかった。さくらは、あまりに孤独だった。目が見えないという理由だけで、彼女には、振り払うことのできない孤独感がある。自分を平気で“出来損ない”と表現してしま

うことが、僕にはあまりに悲しいことのように思われた。

第16話

「もしも」

僕は、慰めるつもりでもなく、同情するつもりでもなく、こう言った。

「僕が、さくらを愛すると言ったら？」

さくらはこちらを向いた。暗闇のせいで、彼女の表情はまったくわからなかった。笑っているのか、悲しんでいるのか、怒っているのか。彼女は言った。

「そうしたら、私は独りぼっちじゃなくなるわ」

そのとき、僕のポケットの携帯電話が鳴り響いた。さくらは身体を震わせた。いきなりの音に驚くのは当然だろう。

「僕の携帯だよ」

僕は、携帯の画面を見た。見知らぬ番号が並んでいる。どうせいたずら電話か、間違い電話あたりだろう。そう考えたとき、ふと、前に見た電話番号が頭に浮かんだ。090から始まる、あの電話番号。

葛西さん？ 僕はそう思った。確か、前に電話番号だけ教えた覚えがある。出ようか。しかし、隣には今、さくらがいる。この電話を取ってもいいのだろうか。

「ねえ、葛西さんからじゃないかしら」

さくらは言った。察しがいい。僕は、どうしようか、と尋ねた。電話は未だにけたたましく、六畳の狭い部屋に音を響かせている。

「出てあげて」

僕は、さくらがそう言うのならば、通話のボタンを押した。

「……もしもし」

「青木くん？ 葛西圭子ですけど」

葛西さんの声だ。紛れもなく。

「あの子がいないの。もうこんなに真っ暗なのに」

ずいぶんと冷静な声だった。心配ではないのだろうか。僕は、素直に、自分が今さくらと一緒にいることを話した。

「そう……ご迷惑かけたわね。今から車で迎えに行くわ。そこのアパートの住所、教えてくださらない？」

僕は、アパートの住所を答えた。

「ええ、わかった。そこなら近いから、すぐに着けると思うわ」
そう言って葛西さんは電話を切った。僕は一つ息を深く吐いた。

さくらは、僕に身を近づけてくる。

「……来るの？ あの人」

「うん」

僕がそう言うと、さくらは怯えた様子で僕のシャツの端を握った。僕は、震えながらシャツを握るさくらの手を取った。暗闇の中、さくらの頬を手でさぐった。柔らかな肌が手に触れた。

僕は、小さなさくらの頬を両手で包み込むようにした。さっき、さくらが僕にしたように、今度は、僕がさくらの顔を触った。額から、あごの輪郭から、鼻、まぶた……。滑らかなさくらの肌に、手のひらを這わせた。最後に、僕の指はさくらの唇に触れた。

“ゆうじ”と、微かに彼女の唇が動いた。僕は、彼女の唇にキスをした。柔らかな唇だった。

「もしも」

僕は、唇を離すと、言った。

「僕がさくらを好きだと言ったら？」

そのとき、窓の外で、車のエンジン音が聞こえた。さくらは、びくっと身体を震わせた。僕は、彼女の頭を撫でながら、大丈夫とだけ言った。そして、ためらう彼女を立ち上がらせた。

「行こうか」

さくらは小さくうなずき、ゆっくりと玄関先へ歩いた。僕は、目をつむって歩いてみた。少しだけ、さくらと同じ気持ちになれた気がした。気のせいかもしれないけれど。

さくらは、玄関まで来ると、はつきりと、けれど優しい声で言っ

た。

「ありがとう」

その声は、初めて出会ったときの声よりも、柔らかかった。

第17話

カンカンカン……と、階段を下りていくと、目の前の道路沿いに、黒いぴかぴかの車が一台止まっていた。電灯の鈍い光に照らされて、その車は、わずかに不気味に見えた。さくらは、僕の腕にしがみついたまま、僕と一緒に階段の下に立っていた。

車の扉が、バンと開いた。さくらは身震いした。僕は、小さな声で、彼女に大丈夫と言った。

「さくら」

葛西さんが車から出てきた。白いふわふわの髪の毛は、今日は少し乱れていた。僕は、さくらの背中をゆっくりと押した。さくらは、ようやく僕の腕からするりと自分の手を解くと、一歩ずつ、葛西さんの方へ歩み寄った。

葛西さんは、うつむいたままのさくらに近づき、その顔を自分の方に向けさせた。それから、さくらの頬を叩いた。さくらは、悲鳴に近いような声をあげて、叩かれた頬を手で覆った。細い肩は、小刻みに震えている。

「心配したのよ」

そう言うと、葛西さんは、さくらを抱きしめた。葛西さんの目から、涙が落ちるところを、僕は見逃さなかった。

「もう、どこへも行かないで」

その言葉に、さくらは肩の震えを止めた。そして、しばらくしたのち、また震え始めた。しかし、その震えは、恐怖の震えなどではなかった。彼女は泣いているのだ。葛西さんに抱かれて、彼女は泣いている。

電灯のぼやけた光が、葛西さんとさくらを照らしている。僕は、二人を残して、そのまま自分の部屋で上がっていった。部屋に入り、電気をつけると、確かにさくらの温もりが部屋に残っている気がした。この部屋で、僕は、さくらを抱きしめ、そして、彼女にキスを

した。けれど、そんなことは、今となっては過去のことだ。僕は、またどうしようもない孤独感に襲われた。

彼女は、愛されている。強く、強く愛されている。僕なんかの安っぽい愛情なんか、ものもしないくらいに、彼女は愛情を与えられているのだ。

彼女は孤独なんかじゃない。愛してくれる人間が、身近にいるのだから。

僕は、間違いなく彼女に嫉妬していた。目が見えなくても、人からの愛情を一身に受け取る彼女に。目が見える自分は、どうあがいても得ることができそうもない、途方も無いくらいに深い愛情を、彼女はいつもたやすく手にしている。――目が見えない理由だけで。

第18話

それからというもの、僕は彼女と会わなかった。

「青木」

工場の中で、僕を呼ぶ声が響いた。

「違うだろ。前にも注意したじゃねえか」

荒々しく僕を叱り付ける声。僕は、はい、と返事をし、頭を垂れた。いつもと変わらない日常だ。いや、むしろ、日常生活に違う新鮮なものを求める方が間違っているのかもしれない。

ここのところ、妙に胸がざわざわする。孤独と、無力感が交互に僕を襲ってくる。

昼休みになった。僕は、食欲がわかず、工場の隅に座って、ぼーっとしていた。

「おい」

誰かが僕の肩を叩いた。僕は、ゆっくりと顔を上げた。瀬戸さんがいた。三歳年上の。

「おまえ、気分でも悪いのか？」

「別に、そういうわけじゃ」

瀬戸さんは、ふーん、と言いながら、僕の隣でコンビニのパンをかじり始めた。口の中でパンをくちやくちややりながら、瀬戸さんは言った。

「女か？」

にやりと笑って、瀬戸さんは僕の顔を覗き込んだ。僕は思わず目をそらした。

「やっぱりか」

「疲れてるだけです」

僕は勢い良く立ち上がった。

「おまえさ」

瀬戸さんは、その場を離れようとする僕に向かってこう言った。

「優しすぎるんだよ」

僕は思わず振り返った。瀬戸さんは、いつの間にたいらげたのか、空っぽになったパンの袋をひらひらさせていた。汚れたつなぎを着て、瀬戸さんは僕の方をじっと見た。

「もうちょっと、自分勝手にやってみろよ。でなきゃ後悔するぜ」
自分勝手？ 何を自分勝手にしろというんだ？ 僕にはわからなかった。

「おまえが何に悩んでるのか、俺にはわからねえけどさ」

瀬戸さんはそれだけ言って、工場の奥へ引っ込んでしまった。僕は、瀬戸さんに言われた言葉を、何度も何度も繰り返した。

そのときだった。

「青木」

他の従業員が僕を呼んだ。

「会いたいて奴が来てるぞ」

僕の頭には、その瞬間、葛西さんの顔が浮かんだ。ここ数週間会っていないのに、あの真っ白な頭と、上品な様子は今でも鮮明に思い出すことができた。

「行かなきゃダメですか？」

おそろおそろ尋ねる僕に、その従業員は首を傾げた。

「まあ、忙しいなら断ってきてもいいけど」

「お願いします」

僕がそう言うと、その従業員は頭をかきながら歩いて行った。僕は、罪悪感を覚えながら、工場の天井を見上げた。むき出しの天井が、僕の頭を冷ややかに眺めている。もう、葛西さんのことも、あの子のことも、すべて忘れたいと思った。僕には、……いや、あの子には、もう僕は必要ない。会う必要性はもうない。だから僕は会っちゃいけない。関わることはできない。もし会えば、愛情を受ける彼女と、孤独を感じ続ける僕との間に、大きな隔たりを感じることになる。それだけじゃない。きっと僕は、彼女を僕の孤独のせい

で苦しませることになるかもしれない。

「だから……本人がそう言ってるから仕方ないじゃないですか」

少しいらついた声が聞こえてきた。その声と一緒に、聞き覚えのある声もした。

「ゆうじ」

僕ははっとした。あの子だ。あの子が来ている。僕は、反射的にその声の方へ駆け出していた。

案の定、そこにはあの子がいた。僕は、あえて声を出さなかった。声さえ出さなければ、彼女は僕がここにいることに気付くことはない。目が見えないから。でも、何故だか僕は切なさで胸がいつぱいだった。

「ゆうじ、そこにいるの？」

彼女は言った。その台詞に、従業員は周りを見渡した。もちろん、物陰から眺めていた僕の存在に気付いた。そして彼は僕を呼ぶ。彼女は僕の存在を知り、何度も何度も名前を呼ぶ。それこそ、迷子になった子どものように。

何故、僕らは出会ってしまったんだろう。

僕は、目の見えない彼女を支えきれん力なんて持っていない。彼女が愛されていることに対しても、嫉妬を感じるような小さい男だ。それなのに、どうして僕は彼女を女性として意識してしまったんだろう。こんな情けない僕に、彼女を好きになる資格なんてあるはずもないのに。

第19話

結局、僕は彼女のもとへ行かずに終わった。行けなかったのだ。

あとからどんなにあの従業員に咎められても、僕は“どうしても会いたくなかった”としか言えなかった。確かに、どうしても会いたくなかったのは事実だ。けれど、その中には、どうしても“会えなかった”というものが込められていた。

彼女に会わないまま、夏は終盤を迎えて行った。世間では、お盆の帰省ラッシュに高速道路で事故が起きたことや、水難事故が話題に上っていた。しかし、そのどれも僕にはどうでもいいことだった。僕は、ちょうど自分が蟬の抜け殻のように思えた。そのとき、彼女があの日話した、蟬の話が頭をよぎった。

夏の終わりを告げるツクツクボウシの声がする。アパートの狭い部屋で、僕はその声だけを聞いていた。そのせいで、携帯電話が鳴っているのになかなか気付かなかった。僕は焦って携帯電話を開き、着信の相手を見た。

すぐに通話ボタンを押そうとして、僕はためらい、そのまま着信を拒否した。相手は、言うまでもない、葛西さんだった。葛西さんからの電話は、僕があの子と会わないことに決めてから、数回かかってきていた。僕はそれらに出ることはなかった。

携帯電話を床の上に放り出し、寝転がって天井を見上げた。無機質な色。相変わらず、この部屋は僕をひどく拒んでいるように思われた。

どれくらい、そうやって天井を眺めていただろうか。ふいに、部屋の呼び鈴が響いた。僕はゆっくりと身体を起こすと、玄関へ向かった。扉を開ける前に、覗き穴から外を見た。真っ白なふわふわの髪の毛――。葛西さんだ。僕は、どうしたものかと悩んだ。

「青木くん、葛西です。いらっしやらないの？」

僕は仕方なく扉を開けた。久々の葛西さんの顔が見える。少し、痩せたようだ。

「お久しぶりね」

にこりと微笑み、彼女は僕に言った。僕は、かるく会釈を返すしかなかった。

「ランチでも一緒にどうかしら」

第20話

葛西さんは、僕を車に乗せ、どこかへと走り出した。

「待っていたのよ」

「え？」

僕は間拔けな返事をした。葛西さんは車を運転しながら、ふふつと笑う。笑いが、どうしようもないくらい、あの子——さくらに似ていた。胸がきしんだ。

「あなた、あれ以来うちに来なかったじゃない」

「すみません」

「あら、そういう意味じゃないのよ」

車は、少し狭い道へ入って行った。薄暗い道をしばらく走ると、高級な住宅街のある通りに出た。茶色のレンガ造りのきれいな邸宅が、両サイドに並んでいる。この町に、こんな高級な通りがあったなんて知らなかった。

ほどなくして、ガーデンングのきれいな、小さな喫茶店のようなところに着いた。クリーム色の壁は、無造作に塗りたてられたような風合いだった。

「ここでいいかしら」

僕は黙ったままうなずいた。そして、自分が、いつもの擦り切れたジーンパンを履いていることに気付いた。ただ、運が良いと思えたのが、シャツがこの前買ったばかりのきれいなものだということくらい。自分の服装に目を落とす僕を見て、葛西さんはまた笑った。

「気になさらないで。けっこう周りはそういうのに無関心なんだから」

ああ、やはりさくらに似ている。僕は、何だかとても悲しくなつて、気付いたら泣いていた。

「どうなさったの」

葛西さんは驚いて僕の顔を覗き込む。僕は、急いで涙をこすり取

り、何でもないとやった。葛西さんは、そう、言いながらも、表情を硬くした。僕は、慌ててわざと、お腹がぺこぺこだと言ったりして、明るく振舞った。

「このランチは本当に美味しいの。値段のわりに量もあるのよ」
葛西さんは、僕の下手くそな芝居に付き合ってくれた。僕は、安心したような情けないような、何とも言えない気持ちで、楽しみだな、などとつぶやきながら、車から降りた。葛西さんは、間違いなく僕の異変に気付いているはずなのに、それについては何も触れなかった。気遣いのできる、優しい人だと、僕は思った。

店の扉を押すと、カランカランとベルが音を立てた。一瞬、教会の鐘を思い浮かべた。葛西さんは、一番奥の、窓辺の席を選んだ。

「時間が遅いから、空いていて良かったわ」

葛西さんは店にある大きな柱時計を見ながら言った。一時半過ぎ。もうそんな時間かと、僕は自分の携帯と時間を見比べた。最近、時間と日にちがわからなくなっている。生活も、仕事以外では不健康極まりないくらいに不規則だった。まともに食事を取るのも、久しぶりかもしれない。

「まだ、ランチは大丈夫かしら」

やってきた店長らしき男に、葛西さんは尋ねる。その男は、愛想のいい笑顔で、はい、とうなずいて見せた。

「じゃあ、ランチ二つ、お願いするわ。あなた、飲み物は何がいいの？」

僕は、窓の外を眺めていて、質問に追いつけなかった。葛西さんはもう一度優しく僕に尋ねる。

「飲み物は何がいい？ コーヒーとか、紅茶とか……そうね、あとはジュースくらいかしら」

「紅茶で、お願いします」

僕は適当に言った。葛西さんは、にこりとうなずき、オーダーを済ませた。運ばれたおしぼりで手を拭いながら、葛西さんは話し始めた。あの子——さくらのことを。できれば聞きたくなかった。葛

西さんにも会いたくはなかった。けれど、心のどこかではさくらを求めていることに、僕は自分で気付いていた。だから、拒みきれなかった。

「ゆうじがね、ゆうじがね、って。子どもみたいに話すの。あなたのことばかり」

さっきの男が、僕の前に紅茶のカップとポットを置いた。葛西さんの前には、アイスコーヒーを置いた。葛西さんはアイスコーヒーのストローの袋を破った。そして、グラスの中にストローを突き立てながら続けた。

「この前、あなたの工場に会いに行ったらしいの」

僕は、この前の記憶が蘇り、何だか息が詰まるように思えた。

「お仕事、忙しくて会えなかったって言ってたわ」

「まだ、やりかけの仕事があったので……手が離せませんでした」また、下手くそな芝居をしてしまった。“やりかけの仕事”なんてなかった。本当は、僕が逃げただけだったのに。

「会いたい、会いたいって。今度いつうちに来るのって。最近はそのばかり。あ、今日は私のおごりだから。前にあなたがさくらにおごってくれたお昼のお礼に」

「……すみません」

「ううん。あなたのおかげでね、私たち、会話が増えたのよ。毎日楽しくて」

そういえば、僕はさくらのこと何も聞いていない。僕は、僕のことだけ彼女に話して、彼女はまだ彼女のことを僕に教えてくれなかった。葛西さんは目を細めて言う。

「あなたに会う前は、会話なんて会話は一つもなかったわ」

そのとき、僕が初めて葛西さんの家を訪ねたときのさくらの表情を思い出した。人形のように、表情を動かすことなく、彼女はずっとうつむいていた。あのときの僕は、それがどうしてかなんて、まったくわからなかった。

少しずつ、少しずつ、僕があの子に抱いていた疑問が、するする

とほどけていく気がした。

第21話

僕は、紅茶をカップに注いだ。鮮やかな赤が目飛び込む。

「ね、その紅茶、いい香りでしょう」

葛西さんは嬉しそうに言う。僕は、はい、とうなずく。芳しい香り。そう言えば、初めて葛西さんの家を訪ねたときも、紅茶が出た。確か僕は、熱くて、一口二口飲んだだけで終わってしまった。

ランチが二つ運ばれた。僕と葛西さんの会話は、食事で一時中断した。僕は、自分から口を切る気はなかったし、葛西さんも、しばらくは食えることだけに集中していた。

食事が八分どおり済むと、葛西さんはようやく話を再開した。僕は、少々冷めて、飲みやすくなった紅茶を口に含みながら、黙って聞いていた。さくらのことを。

「あの子、私のこと、恐いとか言っていたでしょう」

僕は、無言で小さくうなずいてみせた。葛西さんは恥ずかしそうに笑う。

「ただお互いに引いていただけだったのよ。あの子は私に気を遣って、私もあの子に気を遣っていたの。だから、会話も続かないし、気まずい雰囲気だけが流れてたわ。私はあの子に嫌われてると勘違いしてた。あの子も、私が自分を嫌っていると勘違いしてたの。でも、あの日の夜、あの子を迎えに行ったとき、恐くて恐くて仕方なかった。もし、目の見えないあの子に何かあったらって考えたら、他のことに手がつかなくなって。だから、思わず手が出ちゃったの。……あの子のほっぺた、あの後真っ赤に腫れちゃって。申し訳なかったわ。せっかく可愛い顔してるのにね」

葛西さんは、アイスコーヒーを一口飲んだ。それから、砂糖を一杯、グラスの中に落とした。

「私たち、親子に見えるかしら」

ふいに彼女は尋ねた。僕はうなずいた。

「よく似てるって言われるけどね。私、あの子の母親の妹なの。

つまり叔母さんってわけね」

叔母さん？　じゃあ、母親は、亡くなったのだろうか。葛西さんは、少し笑いながら続けた。僕は、ランチの皿に残っていたトマトの一欠けらを口に放り込みながらそれに耳を傾けた。

「私があの子の母親代わりになろうって決めたのに、何だかんだで、青木くんに手助けしてもらっちゃって。青木くんがいなかったら、私たち、ダメだったもの。前に話したでしょう。私、あの子に殺されるかもって」

何度も僕の脳裏をかすめた台詞。さくらが、葛西さんのことを話すとき、ずっと頭で渦を巻いていた台詞。僕は、以前に葛西さんと昼を食べたときのことを思い浮かべた。

「どうしても上手いかなかったの。あの子は私に心を開かなかった……ううん、開けなかったんでしょね、優しい子だから。

私はストレスで白髪がどっと増えて、何だか毎日疲れているみたいで。更年期障害ってやつかもしれないけど」

そう言って、葛西さんは笑った。今だから笑えるんだろう。今の葛西さんは、さくらとの生活に希望を見出しているようだから。生き生きしている。僕とは正反対なくらい。

第22話

「ねえ、今度の日曜は、うちに来れる？ お仕事、お休みでしょう？」

僕は、その質問を受けたとき、またどうしようもない孤独感を覚えた。

「いいえ」

小さくそう言って、僕は葛西さんと目を合わせないよう、窓の外を見た。日差しが強い。街路樹が、くっきりとアスファルトに影を落としている。店内のBGMにかき消されながらも、蟬の声がわずかに聞こえる。

「忙しいの？」

葛西さんはまた聞く。

「あの子、本当に青木くんと会いたいっていつも言ってる……」

「もういいんです」

僕は思わず声を高くしてしまった。店長らしき男が、こちらをちらりと見る。僕は、少しうつむいた。

「ごめんなさい。……気を悪くしたかしら」

「必要ないんです」

今度は、少し声のトーンを下げた。葛西さんは不思議そうな瞳で僕を見る。

「僕は、さくらが自分と似てるって思った」

もう、無言でなんて通しきれなかった。このまま、上手く隙間をぬって逃げ切るだなんて器用な真似、僕にはできそうもない。だから、不器用でいい、すべて話してしまおうと思った。すべて話して、そして、僕はこの女性とあの子から離れてしまおうと。

「さくらは、自分を“独りぼっち”だと言ってた。僕もいつも独りぼっちでいる気がしてた。だから、僕と彼女は似ていると思った。でも、それは違ったんです」

葛西さんは、真っ直ぐに僕のことを見つめてくる。僕は、その目を直視できないでいた。直視すれば、きっと僕は何も話せなくなってしまう。喉元を熱いものがこみ上げてくるのがわかった。

「僕と違って、あの子は愛されてる。僕なんかをものもしないくらいに、あなたに愛されてる。あの子は孤独じゃない。そんな、愛情を受けて孤独から救われたあの子と僕が一緒にいたら、どうなると思いますか。……僕の孤独は、きっとまた彼女を苦しめるだけです。今でも、愛情を受ける彼女に嫉妬さえ感じるのに。」

もう、僕はさくらに会えない。会っちゃいけないんです」

一息に、僕はそう言った。葛西さんは、これ以上ないくらいに目を見開いて僕を見つめていた。蟬の声がする。さくらの話した、蟬の話を思い出す。結局、クライマックスはどうなる予定だったんだろう。

「……あの子は、あなたを必要としてるわ」

葛西さんはぽつりと言った。

「孤独は広がるものじゃないの。広がるのは、愛情なのよ」

「愛情？」

「あなたがあの子といたからって、孤独をうつすようなことはないわ。あの子は、あなたに愛情を注ぎたがってる。話を聞いてればわかるもの」

さくらが？　僕に？　僕はいまいち理解できなかった。彼女が僕に愛情を？

「あの子の愛情を受けてあげて。あの子にとって、人を愛するのは、生まれて初めてのことだから」

僕は、あの日、アパートでさくらを抱きしめたことを思い出した。彼女の肌の香り、柔らかな唇。妙に鮮明に、生々しい感触が離れないでいる。

「だから、今度の日曜。忙しくないようだったら、ぜひいらして」
葛西さんはそう言って微笑んだ。さくらの笑顔に似ている。僕は、また泣き出してしまった。自分が男だとか、そんな建前も何も気に

することなく、僕は涙をぽたぽた落とした。悲しいのか、嬉しいのか、よくわからない涙だった。でも、それはきれいな涙だった。

第23話

日曜日。

「いらっしやい」

葛西さんが玄関先で手を招く。僕は、擦り切れたジーパンを引きずり、あの豪邸へ足を踏み入れる。相変わらず庭はきれいに整えられている。枯れた向日葵がうつむいている。その向日葵の顔からは、生まれたばかりの種が溢れんばかりに実っているようだった。

「もう、夏も終わりね」

葛西さんはそう言うと、向日葵を眺めた。僕は何も言わずにうなずいた。

「さ、上がってちょうだい。あの子、待ってるから」

僕は、言われるがままに家に上がった。葛西さんが出してくれた若草色のスリッパに足を入れ、フローリングのぴかぴかの床を歩いた。廊下の真っ白な壁に、真っ青な空の写真が掛かっていた。白と青の対比が鮮やか過ぎるくらいだった。写真の隅に、白い字で小さく、“KASAI”と書かれていた。

「それね、私が撮ったの」

葛西さんは嬉しそうに言った。

「こう見えても、昔はけっこうアクティブだったのよ」

思わず僕は笑った。笑うのは何日ぶりだろう。葛西さんは、笑っている僕の腕を引いて、リビングへ通してくれた。リビングのテーブルの上に、桃色の小さな花が飾ってあった。

「呼んでくるから、ちょっと待っててね」

葛西さんはそう言うと、パタパタと走って行った。僕は、リビングに残され、立ちすくんでいた。何だか、緊張していた。さくらは、どんな顔をして来るだろう。久しぶりの僕に、どんなふうに話しかけてくれるのだろう。

数分、僕は立ったままで固まっていた。なかなか二人は来る気配

を見せない。さくらは目が見えないから、時間がかかってもしそれは仕方ないだろうと言い聞かせ、僕はじっと待った。座ろうという気にはならなかった。本当は、僕も彼女に会いたかったのだと、今さながら気付いた。身体中がうずうずする。早く会いたい。さくらに会いたい。

「お待たせしたわね」

葛西さんがようやく顔を見せた。さくらはまだ来ない。

「ほら、青木くんよ。顔、見せてあげなさい」

そう言われて、ゆっくりと、廊下からさくらが出てきた。何だか、前と様子が違う気がする。何が違うんだろう。そう考えて、僕は、さくらが少し、化粧をしていることに気付いた。

「あいさつは？」

葛西さんはさくらに言う。さくらは、小さく頭を下げた。僕は、上手く声が出せなかった。何を言えいいのかわからなかったのだ。さくらは、ゆっくりと歩いてきた。そして、手を伸ばした。相変わらず白くて、細い腕だった。僕は、その手を取った。

「ゆうじ」

彼女は僕の名前を呼んだ。そして、僕の手を硬く硬く握った。そのまま、僕は立ちすくんでいた。さくらの唇がわずかに震えている。僕は、何だかとても息が苦しくなって、彼女の名前を呼んでやれなかった。

「お茶、置いておくわね。私、奥の部屋にいるから。何かあったら呼んで」

葛西さんは、いつの間にかテーブルの上にアイスティーを二つ用意していた。僕は頭を下げた。葛西さんはにこりと笑うと、そのままりビングを出て行った。廊下を、スリッパの擦れる音が遠ざかっていくのがわかった。

「ゆうじ」

さくらは、また僕の名前を呼んだ。僕は、さくらの身体を引き寄せると、強く抱きしめた。何だかもう、わけがわからないくらいに、

彼女が愛しかった。このまま離したくないとさえ思えた。

第24話

「蟬のお話、聞いて」

僕の腕の中で、さくらは言った。僕は、前に聞いた蟬の話をゆつくりと蘇らせた。女の子がいて、夏にその子のお母さんが亡くなり、そして、女の子は公園へ行かなくなって……。さくらは、小さな子どもに読み聞かせるように、話を暗証してみせた。

「女の子が走って帰る途中、小さな女の子が一人で泣いていた。」

女の子は、その子に声をかけた。 “ どうして泣いているの ” って。その子は、泣きじゃくりながら、 “ ママが死んじゃった ” と言った

さくらは、僕の胸に寄りかかるようにして、続けた。

「泣いていた小さな女の子は、こう言った。 “ ママは私を愛していなかったから、行ってしまったの ” って。それを聞いた女の子は、自分のママを思い出した。自分のママは、自分をどれだけ愛してくれていたのかしらって、じっと考えた。そしたら、また一匹、公園で見たのと同じように、蟬が目の前でぽんと落ちて動かなくなった。女の子は、泣き続ける小さな女の子にこう言ったの。 “ あなたは、ママを愛していたの？ ”。そしたら、その子は涙を目にいっぱいためて、うん、ってうなずいた。女の子は、その子の涙をぬぐってあげながら、言った。 “ あなたが愛していたぶんだけ、ママもあなたを愛していたの。愛は、いっぱい広がっていくものだから ”。女の子は、足元で死んでいった蟬を見つめながら、続けて言ったわ。 “ みんな、一生懸命生きているのよ。短くても、長くても、命は一つだけだもの。あなたのママも、私のママも、あなたと私をいっぱい愛して、一つの命を終わらせただけなのよ ”。女の子がそう言って、次に小さな女の子を見たとき、その子はもうそこにはいなかった。あとかたもなく、消えていたの。女の子は、何だかとても不思議な気持ちになった。足元の

蟬を拾い上げて、近くに生えてた木の下に埋めてあげた。それから、少しだけ笑って、ゆっくり歩いて家に帰った。とても暑くてとてもじめじめした日だったけど、とても気持ち良かった。何だかとても嬉しくて、女の子はとても幸せだった」

さくらはそこで話を切った。そして、寄りかかっていた僕の胸から少し離れた。

「どう？」

少しだけ不安そうに僕に尋ねると、さくらは前と同じように僕のシャツの端を握った。

「おしまいよ。もうお話はないわ」

僕は、さくらの顔を見ながら、何だかとても悲しくて切なくて仕方なかった。

「ゆうじ？」

涙が、僕の頬をつたわった。ぽたぽたと流れ落ちた。シャツを握るさくらの手にも落ちた。身体が震えた。さくらは、僕が泣いているのに気付き、首をかしげながら、僕の頬のところへゆっくり手を伸ばした。

「どうして泣くの？」

さくらは僕の涙を指でぬぐった。お話の女の子が、小さな女の子にしてあげたのと同じように、僕の頬に指を当て、優しく涙をぬぐった。

「これは悲しいお話じゃないのよ。女の子が、一つ成長するお話よ」

「わかってる」

僕は、ようやくそう言った。さくらはふふっと笑うと、僕の頬を両手で包んだ。そして、涙で濡れた僕の頬にキスをした。

「さくら」

僕が名前を呼ぶと、さくらは、なあに、と返事をした。僕は、彼女に愛情を与えられている。確かに、溢れんばかりの愛情を、彼女は僕にくれようとしている。

「僕は、君が好きなんだ」

「私も、ゆうじのこと、大好きよ」

にこにこしながら、さくらははっきりと、優しくそう言った。

「ずっとそばにいたいわ。　ゆうじのそばにいたい」

第25話

僕は、さくらがどうして僕を求めるのか、その理由がわからなかった。さくらが僕を好きだと言ったことは、とても嬉しいことだった。けれど、僕は、“何となく” 生きる人間だ。さくらにふさわしいとは到底思えなかった。

「僕は、目の見えない君を、しっかり支えて上げられないよ」
「わかってるわ」

さくらは、僕の手を両手で握り、そう言った。

「僕は、僕の孤独のせいで、君を苦しませるかもしれないよ」

「私がいるから、もう孤独じゃないわ」

「僕は、夢もなにも持たずに生きる人間だよ」

「それも、わかってるわ」

さくらは、僕の身体に手を回した。細い腕が、僕を抱きしめた。さくらの甘い香りがする。僕は、こんな自分が情けなくて――さくらに嫉妬さえ感じていた自分が情けなくて、仕方なかった。

「好きだから、私はゆうじを愛するの。 ゆうじがどんな人間かなんて、私は気にしないわ。 ハンバーガーと一緒によ」

「ハンバーガー？」

そういえば、さくらとファーストフード店に入ったとき、さくらは言った。ハンバーガーが美味しいから、誰も何が入っているかなんて、気にしない。そんな感じのことを。

「僕はハンバーガーなの？」

「たとえばの話よ」

さくらは笑った。僕も、それにっられて笑った。僕は、彼女の愛情を感じた。彼女が僕に注ぐようにしている愛情を。さくらは人を愛するのが生まれて初めてだと、葛西さんは言っていた。だからだろうか。生まれて初めて人に与える彼女の愛情は、恋の駆け引きとか、そんな小細工的要素は何一つ含んでいない。あくまで、真っ直

ぐに、迷いなく、彼女の愛情は、僕のもとへやってくる。あまりに強烈で、激しくて、でも、どこか優しく、僕の心をとらえて離さないのだ。

「ねえ」

さくらは、はっきりとした口調で言った。

「あのとき、最後に私にした質問、もう一度して」

「最後にした質問？」

僕は、彼女の言う“あのとき”を思い出そうとした。そして、アパートの片隅で、僕が最後に言った一言が浮かんできた。僕は、ゆつくりとその質問を繰り返した。

「もしも、僕がさくらを好きだと言ったら？」

さくらは、嬉しそうに答えた。

「私も負けないくらいに、ゆうじを好きになるわ」

迷うことなく、自信たっぷりに言う彼女を見て、思わず笑った。

さくらも、いつものように笑った。

「もう、ゆうじは独りぼっちじゃないの。私がそうさせないから」

僕は、嬉しくて、ようやく治まった涙を、また流し始めてしまった。

「ありがとう」

今まで何度もさくらに言われた言葉を、今日、僕はさくらに返した。

蝉の声がする。蝉の話の中の少女は、一つ成長した。僕も、さくらのおかげで、一つ大きくなった気がした。一週間たらずで死んでいく蝉は、必死に短い命をまっとうする。僕は、蝉の何倍も長い命を、“何となく”生きている。そんなだらしない生き方は、今日から少しだけ変わるだろう。さくらを抱きしめながら、僕はそう思った。

エピローグ

「あら」

僕がコンビニで雑誌を立ち読みしていると、真っ白なふわふわの髪をした女性が声をかけてきた。淡い紫のロングスカートが、とてもよく似合っていた。

「約束は今日の三時でしょう？」

「まだ、時間があったから」

女性は、自分も雑誌を手に取り、真ん中あたりのページを広げた。特に読みたいというわけでもなさそうだった。

「今日はどこへ行くの？」

「クラシックが生で聴きたいって言うので。それを聴きに」

「そう、楽しそうね」

女性は嬉しそうに言った。僕は読みかけだった雑誌を閉じた。

「こういうところ、来るんですね」

「私だってコンビニも大好きだし、デパートのバーゲンにも目がないのよ」

それを聞いて笑う僕に、女性はふいに言った。

「お洋服、選ばれちゃったわ。 “ どれが可愛いの ” って」

「……すみません」

「いいのよ。 楽しいものよ、お洋服を選ぶのって。 それに、最近、あの子のこと、よくわかってきたもの」

真っ白なふわふわの髪は、決して老けているとかいう印象を抱かせなかった。相変わらず、物静かな喋り方。そして、上品な雰囲気。貧乏に慣れっこの僕には、どれもが新鮮に見えた。

「食べ物の好みとか、シャンプーの種類とかね」

「シャンプー？」

女性は、にこやかに言った。

「昨日の夜ね、 “ どうしてシャンプー変えちゃったの ” って。 “

前のやつの方が髪に合ってたのに”って。　やっぱり女の子ね。

メイクもしょっちゅう頼まれるの」

「女の子だと大変ですね」

「あら、あなたも大変じゃなかった？」

女性は、僕の服装を上から下まで眺めて言った。僕は、新しい服を、きちんとしたお洒落な店で久しぶりに買ったことを思い出した。

「現代の若者って感じね。いいじゃない、似合ってるわ」

そう言いながら、嬉しそうに微笑んだ。

「あの子も今日はお洒落してるから、気合い入れなさいね」

からかいながら、女性は僕を肘でつついた。僕は照れくさくて、何度も頭をかいた。にやにやする僕に、女性は少し真剣な瞳で言った。

「でもね、障害者との付き合いは、どこかで必ず壁にぶち当たるものよ」

ふわふわの髪に触れながら、女性は続ける。

「それでも、あなたは大丈夫？」

僕は、いつかあの子に言われた言葉を思い出した。

「好きだから、あの子を選んだんです。あの子がどんな子かなんて、僕は気にしません。……ハンバーガーと一緒にです」

「ハンバーガー？」

女性は、すっとんきょうな声で言ったが、すぐに安心したような、満足げな表情になった。そして、店内の壁にかかっている時計に目をやるやいなや、早口で言った。

「ほら、もう行かないと。デートに遅刻するのは減点対象なんだから」

僕は、腕時計を見た。三時五分前。つい、話しすぎてしまった。焦って女性に頭を下げ、急いでコンビニを出た。

外に出ると、涼しい風が気持ちよく吹いていた。空には、ふわりとしたいわし雲が広がっている。その色は、ふわふわの真っ白な髪の毛を連想させた。

レンガの道の通りに出た。ここからだ、あの家はもうすぐだ。
あの公園の横を通り過ぎ、僕は走った。あと少し。あと少し。

大きなレンガの壁で囲まれた豪邸の前に、髪の高い女の子がぽつんと立っていた。僕の足音に気付いたのか、こちらを振り向く。そして、名前を呼ぶ。

「ゆうじ」

女の子は、僕の方に手を伸ばす。僕は、その手をしっかり握る。

「向こうで、葛西さんと会ったよ」

「デートなのよ」

「デート？」

「葛西さんもね」

僕は、それを聞いて笑った。確かに、今日の服装は、いつにも増して上品さに磨きがかかっていた。化粧も少しばかり濃かった気がする。

彼女は、僕の腕に自分の腕をからめた。

「行こうか」

僕は、そう言って、ゆっくり歩き出した。そのとき、さくらが思い出したように言った。

「ねえゆうじ、教えてあげる」

「何を？」

「私のこと」

さくらはそう言って、いつもの癖のように、腕を組んでいない方の手で僕の服を握った。

僕らの歩き方は、比較的ゆっくりだった。途中、何人もの人に抜かされた。それでも僕は気にしなかった。

僕は、もうあのアパートにいても、孤独を感じることもなくなつた。

彼女の愛情は、誰よりも真っ直ぐで、僕を戸惑わせることも多い。いろんな人と出会い、いろんな感情にもみくちやにされ、疑い深くなった僕は、初めのうち、それを素直に受け取っていいものか、悩むこともあった。それでも、彼女はひたすら僕に愛情を注いでくれた。

たとえば、仮に、またひどい孤独を感じることがあったとしても、きつとそれはすぐに溶けて消えると思う。彼女の愛情さえあるなら。

エピローグ（後書き）

ここまで読んでくださった方々、ありがとうございました。

読み返してみたら、なんとなくですが、薄い感じがする…。あくまで私個人の意見ですけど。

いまさらながらにちょっとばかり後悔してます…。

こんな自分の満足もいかなのような小説を投稿しちゃったこととか。

未熟者です。

最近流行り（？）のあの曲じゃないですけど、ホント、私は未熟者です。

…ということを痛感しました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5077c/>

彼女。

2010年10月8日15時34分発行